

## 4 白山神社の秋祭り

### (1) 白山神社のお祭り

10月になると白山神社で一番大きな祭礼である「白山神社例大祭」がやってきます。

これは、氏神を祀る松河戸における「収穫祭」で、今年の収穫を祝い感謝して、白山神社の神々に民俗芸能などを奉納し、この土地に住む者と神々が一緒に祝い楽しむ「村祭り」です。



現在、白山神社では例大祭の午後に「祭祀の式」を行い、「神楽」、「餅投げ」を奉納していますが、秋祭りも夏祭りと同様に簡素化され、昔の面影を偲ぶべくもなく寂しくなりました。

松河戸は、平成28年(2016)11月区画整理が終了して稲作地帯ではなくなった今は、大神様のご加護に感謝し、氏子の皆がさらに発展し健康に過ごせること、また家庭の安全、無病息災、地域の安全、発展などを神様にお願いしてご加護いただく「秋祭り」として行っています。

秋祭りは「白山神社例大祭」として毎年10月16日に行われてきましたが、現在は10月の第2月曜日(スポーツの日)になりました。

例大祭とは、その神社で定められた日に行う大祭ですので、開催日が変更されたのには、神社の「祭り」を取り巻く環境に大きな変化が起きていることが考えられます。

戦前戦後の例大祭の様子と、その後の変化・住民の祭りへの取り組みについて調べてみることにしました。

白山神社の祭礼

(表1)

	開催月日	行事名	内容	目的
年始の祭り	年の初めを祝い、今年の幸福を願う。 宮中を始め全国で行われています。			
	12月31日～1月1日	元旦祭	初詣	正月神をお迎えし、新年を祝う
	1月14日	左義長	どんど焼き	供物を焼き上げ新年の祈願をささげる (門松の煙によって正月神が再び天に帰られる火祭り)
	3月中旬 立春	きねんさい 祈年祭	としごいの祭り	町内安全祈願 (年の初め(立春)に、豊年満作を祈念する祭り)
夏祭り	身や心を清めて、高温多湿なこの時期に病気などにかからないよう健康を願う祭り 津島神社の天王祭りから伝わる			
	7月 祇園祭りの1週間前	天王始め うんか祭	町内厄除け祭り	悪霊が町内に入るのを防ぐ (稲の害虫駆除の虫送り、オンカ祭を兼ねて行われる。)
	7月 小学校の夏休みに入る第3か第4日曜日	津島神社例大祭 (祇園祭)	(子ども獅子祭)	健康祈願、家族地域の安全 子どもの成長 (夏祭りの中心祭)
7月 祇園祭りの1週間後	提灯山	提灯祭り	天王さまへの奉納 (提灯を飾り天王様に奉納する)	
秋祭り	収穫を感謝する祭り、今は大神様のご加護に感謝し、健康、安全、幸福、発展を願う祭り			
	10月16日(旧10月10日) 現在は10月の第2月曜日	白山神社 例大祭	豊年祭 (もち投げ)	収穫を祝い感謝、大神様のご加護に感謝
	11月2番目の卯の日 (11月13日～24日の日曜日)	いなめさい 新嘗祭	いなめの祭り	町内安全祈願 (新穀を神にささげて収穫を感謝する)

## (2) 白山神社の例祭日

「秋祭り」は、収穫を感謝する祭りで、豊作祈願の春の祭りと対になる関係で、収穫に感謝するお祭りです。

宮中行事の春の「祈年祭」に対する秋の「新嘗祭」が、全国の農村にも伝わり行われてきました。

この新嘗祭とは別に、地方の農村などでは、農民による実りを祝う祭りであるところの「収穫祭」が行われてきました。

いわゆる「村祭り」と言われるもので、松河戸では「白山神社例大祭」が10月16日に行われてきました。



秋の例大祭は、白山神社の氏神様のお祭りです。  
幟も前方に掲げられています。

この時期に行われてきた理由としては、

- ① この辺りの地域では11月上旬から稲刈りが始まり、12月上旬まで農家で最も忙しい時期を迎えるためこの時期は避ける。
- ② この農繁期に入る前の10月中旬は、台風が終わり天候も安定しており、稲の作柄もほぼ決まる時期にあたる。

よって、この10月中旬に「収穫祭」が行われるようになり、10月16日を白山神社の例祭日にしたと思われています。

この収穫の祭りは、土地に暮らす農民たちの地域の絆を深めるための儀式でもあったので、地域独自の奉納芸であるところの民俗芸能が発生してきたと思われています。

田の神に感謝し、神も人々と一緒に祭りを楽しむと考えられたため、氏神をもてなすために音楽や踊りを披露するようになり、「神楽」や「棒の手」などが生まれました。

## (3) 古代から行われてきた収穫祭

松河戸遺跡では、縄文時代の晩期から弥生前期の土器・石器などが出土していますが、これら「生活道具」とともに、土偶や石棒、土製人形など「祈り・まつりの道具」が出土しています。

このような精神文化をあらわす道具は生活道具と区別して「第二の道具」と呼ばれています。



土製人形(松河戸遺跡)

環濠内より検出され、全長(残存部)61ミリ、幅34ミリ、厚さ8ミリ(幅、厚さも最大部)で両足は欠損しているものの全身を表現しており、右腕は肩からやや下がりが味に伸び、左腕を腰にあてた姿勢がうかがえます。

首の部分には、首飾りを表現したと思われる細かい刻みと左肩から胸にかけて襷(たすき)掛けした痕跡がみられます。

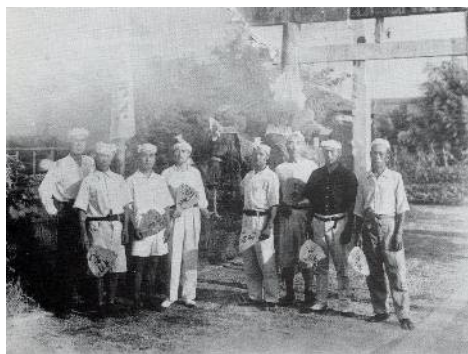
写実的であるという点で明らかに「縄文土偶」とは異なる系譜のもので、伝統様式と外来様式の錯綜する尾張地方での精神世界や生活を考えるうえで大変貴重な資料といえます。

自然に宿る精霊や先祖の霊が、人々の日々の生活に大きく影響していると考えられており、雨が降らないときに行う「雨乞い」、長雨のときに行う「日乞い」、害虫を追い払えるよう祈る「虫送り」、豊作に感謝して行う「秋祭り」など、現在までおこなわれていたような精霊や先祖の霊をまつる祭りが、すでにこの頃から行われていたようです。

#### (4) 戦前、戦後の例祭

例年、凶作その他特別の不祥事がない限り、若連(青年団員)がまつり行事の主体となって、10月16日に村を挙げて例祭が盛大に行われてきました。

祭りが近づくと各島の青年団が中心となり、祭礼の準備や、氏神へ奉納する伝統芸能について、島同士で競い合って氏神様に奉納したものです。



大正中頃、  
白山神社の祭礼時の初老連中の厄払い献馬

##### ① 奉納

戦前までは、秋の例大祭にも「馬の塔奉納」などが行われていました。

例祭に合わせて、還暦連中の厄払い献馬などが行われており、島の集会所新築祝なども例祭に合わせて行われていました。

また、「棒の手」についても、明治以前は松河戸でも行われていたようで、嘉永5年(1852)に新居村(現、尾張旭市)で催された無二流の先達者供養のための「棒大会」へ春日井市内の村が多数参加した中で、松河戸村からも棒の手の参加があったと記載されていることから、祭り時には、棒の手も奉納されていたと思われます。

※ 無二流の棒の手…尾張旭市旧新居村を中心に伝承されてきたもので、現在県無形民俗文化財となっているが、松河戸では明治の中頃に行われなくなったといわれている。

そして「神楽」などの奉納芸、今でいう民俗芸能は祭りの花であり、その土地に住む人々の最大の楽しみでした。



昭和11年  
中島実行組合集会所を新築した時、例祭に合わせて行われた。



尾張旭の無二流棒の手 現在

##### ② 祭りのごちそう

戦後になっても、この白山神社の秋祭りは松河戸においての年間最大の行事でした。

この日は一切の農作業を休み、各家庭ではハレの日ということで精いっぱいのご馳走を作りました。

ご馳走といえば、寿司をつくり親戚などを招待しました。

松河戸の多くの家では「鯖ずし」(さばの1本づくり)を作りました。塩さばをもどして、すし飯を包み、竹皮に巻いて、それを柿の木や家の軒先に頭を下向きに縄で丁寧に縛り付けました。

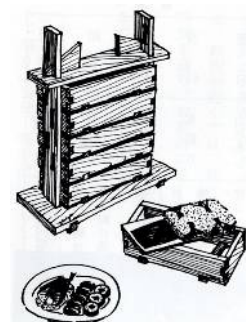
縄をもってぐるぐると柱の周りを回るのは子供の仕事でした。

2、3日後に食べますが、1軒の家で何本も作り親戚に配ったりしました。

アジ寿司は、アジの腹にご飯をつめ、八個ぐらいを箱につめ、押しずし



さばずし一本作り



祭りの食卓「あじ寿司」  
上は、切り寿司(押し寿司)の箱

として食べたものです。

他に、あげずし、巻ずし、切りずし(押しずし)などを作りました。切りずしの具は、角麩<sup>かくぶ</sup>やカンピョウ、レンコン、きのこなどを使いました。

### ③ 祭りの郷愁

祭囃子がひびき、神楽殿(拝殿)では、郷土芸能が演ぜられ、また境内では多くの露店でにぎわいました。

この日は、学校も休みになり、子どもらは家の手伝いも勉強もなく、小遣いを握りしめ露店を駆けずり回りました。

大人たちは、この日だけは昼間から大っぴらに酒を飲むことができました。

まさに、神様と氏子が一体となって、一大交響楽を演じるかのようです。

その秋祭りの幼い日の思い出が、人々にとって一生の間、郷愁となりました。

## (5) 例祭の変化

### ① 青年団の衰退

戦時中に若者たちが召集され、青年団の活動が一時中断したことがありましたが、終戦後に彼らが復員してくると活動が再開され、女子青年団もでき、道風公顕彰活動・祇園祭(おまん)や盆踊り、演芸会など住民親睦活動と同時に、観光旅行など企画し青年団自身の親睦交流の場も設けるなど、以前にも増して青年団活動が活発に行われました。

しかし、郷土の芸能である奉納芸を、積極的に青年活動の柱として実施したのは、だいたい太平洋戦争前頃まででした。

祭りの最大の担い手であった青年団は、戦前と違い強制加入ではなく、農業以外の職業に従事する若者が増え、高校、大学への進学も増え、また、時代とともに人々の価値観も変わりました。

そして、村の伝統文化を後世へ伝えていく役目を担っていた青年団でしたが昭和 30 年代に自然消滅しました。

夏祭りに。それぞれの島から出されていたオマント奉納についても昭和 37 年を最後に廃止になりました。

ムラの若者は、古い芸能には関心を示さなくなり、以降は祭りの奉納芸能であるお神楽を老人だけが細々と行っていました。



▲昭和24年秋 道風青年団の演芸会



▲昭和30年5月1日 男女青年団で伊良湖畔の観光旅行

## ② 例祭日の変更

祭りの変化で一番大きな出来事は、10月16日に行われていた例大祭が、祝日に変更されたことです。

例祭日を定まった日から変更しなければいけなかった理由は、祭の準備を行う年行司や氏子の人々の生活環境が大きく変わり、休日でない仕事などの関係で参加できなくなり、さらに見学者も少なくなったことなどが考えられます。

白山神社例大祭以外にも、津島神社例大祭(松河戸の祇園祭)の日程が変更されています。

津島の天王祭に合わせて旧暦の6月16日を中心に行われていた松河戸の祇園祭ですが、祇園祭の中で「子ども獅子祭」を行ってもらうことから、小学校が夏休みに入る第3か第4日曜日に変更されました。

また、宮中行事である所の祈年祭や新嘗祭についても、都合により本来の日程を変更することがあります。これは、宮司の神社の掛け持ちが多くなり、一斉にできなくなってきたことなどが原因です。

例大祭は、みだりに日時を変更することは許されない性質のものでしたが、昭和41年(1966)に体育の日が制定されると、10月16日に行われていた例大祭は体育の日(10月10日)に行うこととなりました。

平成12年(2000)から、体育の日が10月の第2月曜日になると、毎年例祭日が変更することとなりました。(令和2年(2020)から、体育の日がスポーツの日に名称変更)

この様に、氏神の例祭日が日曜日や祝日などの休日に変更されたのは、松河戸だけではなく全国的な出来事でした。

今、懐かしく思うこととして、昭和35年頃小学校の担任の先生から、「今日は松河戸のお祭りだから松河戸の子は午後から帰っていいよ」と言われ、ほかの地域の子を残して得意げに帰ったことを思い出しました。

戦前や戦後間もなくは、小学校地区の各村に例祭がある日は休校でしたが、昭和41年(1966)に体育の日(10月10日)が制定されて、その日を例大祭とするまでは学校は休みではありませんでした。

そこで、先生方は村のお祭りの重要さを認識されていたのでしょうか、例祭日の村の子どもは半日で帰らせていたようです。

村の伝統文化を後世へ伝えていく役目を担っていた青年団が消滅していく中で、青年団に代わる新しい祭礼行事の担い手として「子ども会」に目が向けられていきます。

昔から		昭和41年		平成12年
10月16日	⇒	10月10日	⇒	10月の第2月曜日
白山神社の 例祭日		昭和39年の東京五輪を 記念して昭和41年(1966)に 体育の日(祝日)が制定される。 白山神社の例祭日を体育の 日(10月10日)に変更する。		ハッピーマンデー制度が適用され、 体育の日が10月の第2月曜日となる。 これにより、毎年例大祭の開催日が変わる こととなる。 令和2年から、スポーツの日に名称変更

### ③ 子ども会への移行と、祭の再現

青年会の解散、伝承者の高齢化により奉納芸が消えていくのを憂慮した人たちは、「子ども会」に目が向けられていきます。

ウンカ虫おくり行事であるところの「雲霞祭」、夏祭り行われる「タルオマント」(後に「子ども獅子」となる。)また、祭りの時の「神楽」などを託しました。

これら村の祭礼行事は大人の援助を受けながら、運営自体は子ども集団の年長者によって行われていました。

こんな折、昭和 50 年(1975)に、市は「郷土芸能の登録制度」を発足させました。

これは、後継者育成のために補助金を出して保存していこうとするものでしたので、松河戸では昭和 56 年 4 月「松河戸神楽会」(会長区長)として登録しました。

「松河戸神楽会」では、子ども会に呼びかけ、「子ども神楽」を発足させ後継者の育成に努め、この年から 10 月に行われる春日井まつり(第 5 回)のパレード(子どもみこし)に参加しています。

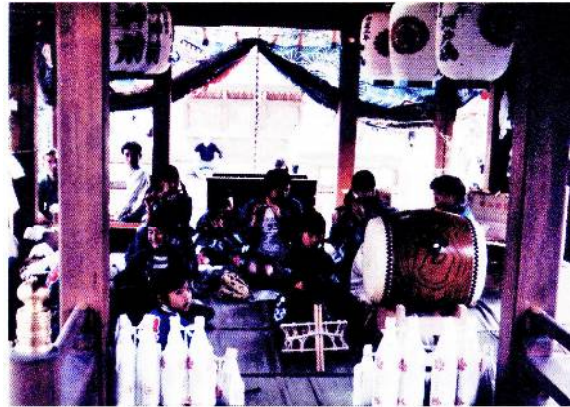
昭和 60 年頃になると、かつての祭りを再現しようと、馬の塔、タルオマントの造り物や神楽台車で町中を練り歩き神社へ奉納などを行っています。

右の写真を見ると、後ろの方に馬を模った山車を引いて子ども達が本道をパレードしています。

これは以前(昭和 30 年代まで)行われていた祇園祭での「おまんこ奉納」を再現したものです。

この後行われた春日井まつり(10 月 20 日)のパレードにも参加しました。

春日井まつりで市民に公開されると、以前の祭りを思い出して工夫し違う形で復活させました。



秋祭りでの「子ども神楽」の演奏 平成 5 年 秋祭り



子ども神楽のみなさん。平成の初め頃



昭和 60 年 10 月 10 日秋祭り 子供会による飾り馬と神楽台車の上へ馬の形をした山車を引いている。

祇園祭のオマント奉納を再現している。

(各島の宿から道風公園に集合し、八幡社から白山神社へ行列を行っている)

子ども山車として馬飾り制作や、子ども神楽の道行き、また、平成8年度まで行われていた「雲霞祭」(オンカ祭)などの再現なども行いました。

しかし、子ども会が、第二次ベビーブームの頃を盛んに平成10年代初頃に消滅すると、春日井まつりへの参加もなくなりました。

そして、御神楽に参加する子どもも少なくなったため、ふれあいの家にてカセットテープに収録(平成12年9月15日)して保存することとしました。

○笛 長谷川郁子、斉木啓子、長谷川久幸、長谷川順子、長谷川千紗 ○太鼓 岡島貢



子ども神楽「神楽会」昭和60年10月20日



春日井まつりにて、子ども会が、「子どもみこし」と「おまんこ」再現



ウカ虫送り行列のみなさん  
昭和60年の第9回春日井まつりに参加しました。

#### ④ 現在の例大祭

区画整理が終わった現在は、神社にて午後「神楽演奏」「式典」「もち投げ」を行っていますが、昔の例大祭の面影をしのぶべくありませんが、寂しくなりました。

現在、白山神社の祭礼には、かつての「子ども神楽」で活躍した人たち6~9名が、各地から集まり神楽を奉納していますが、その後の後継者が育っていないのが懸案事項となっています。



例大祭に向けての練習風景 白山神社において  
かつての「子ども神楽」のメンバー 令和元年6月



例大祭でのもち投げ  
令和元年10月14日

新嘗祭は11月の2番目の卯の日に宮中に伝わる行事で、天皇が天照大神をはじめとする天地の神に、その年に収穫された新穀や新酒を供え、農作物の恵みに感謝する儀式です。

明治5年に太陽暦が採用された際、新暦11月の2度目の卯の日が11月23日にあたったことから、それ以降11月23日が「新嘗祭の日」となったとのことです。

新嘗祭は、戦前までは日本の祭日として扱われ、戦後は「勤労感謝の日」となりました。

白山神社でもこれに倣い、11月23日に新穂を神様にささげて収穫を感謝し、来年の豊穡を祈るお祭り(収穫祭)をしていました。

農地がなくなった今は、11月の2番目の卯の日が11月13日～11月24日の間に変動するため、この間の日曜日に行っており、白山神社の大神様のご加護に感謝を申し上げて、健康、安全、幸福、発展などを神様にお願いしています。

### (7) 各農家で行われていた収穫祭 秋あげ(亥の子)

稲刈りが済み、粃を玄米にし終わると、区長の触れで日が決められ、家々では、ぼた餅(秋上げぼた)を作り、農具に供えたり、親せきなどに配ったりしていました。

「亥の子」は、旧暦10月(亥の月)の最初の亥の日のことで、新暦である現在では11月のことです。

宮中行事として、貴族の間に広まるようになったと言われていますが、その後、亥の子が稲刈りの時期と重なっていたことから、農家の人たちの間で田の神様をお祀りする収穫祭として広まったといわれています。

松河戸では、11月下旬頃秋上げ(亥の子)として、各家において行われていました。



ぼた餅 (秋上げぼた)

松河戸文化科学探求隊  
隊長 長谷川 浩  
080-3657-7052  
松河戸町の沿革ホームページ  
<http://matsukawado.com/>